

第 2 8 期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第 4 回 平成 2 0 年 1 0 月 2 7 日 (月) 実施																																																		
会 場	市役所白山浦庁舎 2 - 4 0 3 会議室	傍聴人	0 人																																																
会 議 内 容	1 生涯学習に関する市民意識調査について 2 現状と課題について 3 計画策定に向けた骨子づくりについて																																																		
出 席 者	<table border="0"> <tr> <td>【社会教育委員】</td> <td>伊井 昭夫</td> <td>中村 恵子</td> <td>【事務局】</td> <td>長谷川教育次長</td> <td>田中教育次長</td> </tr> <tr> <td></td> <td>五十嵐吉春</td> <td>長谷川央子</td> <td></td> <td>八木中央図書館長</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>内田 健</td> <td>福島 實</td> <td></td> <td>丸山中央公民館長補佐</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>笠原 孝子</td> <td>真島 一</td> <td></td> <td>梅津地域と学校ふれあい推進課長</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>齋藤 勉</td> <td>南 加乃子</td> <td></td> <td>玉木生涯学習課長</td> <td>加藤生涯学習課長補佐</td> </tr> <tr> <td></td> <td>新藤 幸生</td> <td></td> <td></td> <td>鈴木係長</td> <td>江花副主幹</td> </tr> <tr> <td>【公民館長】</td> <td>土田豊栄地区公民館長</td> <td>平田中地区公民館長</td> <td>乙川亀田地区公民館長</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>船越白根地区公民館長</td> <td>上西坂井輪地区公民館長</td> <td>山上巻地区公民館長</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>			【社会教育委員】	伊井 昭夫	中村 恵子	【事務局】	長谷川教育次長	田中教育次長		五十嵐吉春	長谷川央子		八木中央図書館長			内田 健	福島 實		丸山中央公民館長補佐			笠原 孝子	真島 一		梅津地域と学校ふれあい推進課長			齋藤 勉	南 加乃子		玉木生涯学習課長	加藤生涯学習課長補佐		新藤 幸生			鈴木係長	江花副主幹	【公民館長】	土田豊栄地区公民館長	平田中地区公民館長	乙川亀田地区公民館長				船越白根地区公民館長	上西坂井輪地区公民館長	山上巻地区公民館長		
【社会教育委員】	伊井 昭夫	中村 恵子	【事務局】	長谷川教育次長	田中教育次長																																														
	五十嵐吉春	長谷川央子		八木中央図書館長																																															
	内田 健	福島 實		丸山中央公民館長補佐																																															
	笠原 孝子	真島 一		梅津地域と学校ふれあい推進課長																																															
	齋藤 勉	南 加乃子		玉木生涯学習課長	加藤生涯学習課長補佐																																														
	新藤 幸生			鈴木係長	江花副主幹																																														
【公民館長】	土田豊栄地区公民館長	平田中地区公民館長	乙川亀田地区公民館長																																																
	船越白根地区公民館長	上西坂井輪地区公民館長	山上巻地区公民館長																																																
会 議 録	<p>(事務局) 定刻には多少早いですが、全員お揃いでございますので、第 28 期社会教育委員会議第 4 回を開催させていただきます。 本日は全委員の皆様からご出席をいただいておりますので、本会議が成立しておりますことをご報告いたします。 資料説明 では、ここからは齋藤議長に進行をよろしく願いいたします。</p> <p>(齋藤議長) それでは 2 協議事項に入ります。 第 2 回の会議で区の訪問調査報告が行われましたが、その報告内容について修正が必要ということになりました。ブックバスについて、中央図書館長より説明をお願いします。</p> <p>(中央図書館長) 館長の代理で出席させていただきました、企画管理課長の渡辺と申します。どうぞよろしくお願いいたします。 第 2 回会議で、ブックバスが今年から中止になったというご報告をいただきましたが、合併時の事務局調整で、当分の間、継続するというので、現在も継続しておりますので、その旨、修正をお願いいたします。</p> <p>(齋藤議長) それは訪問調査なされた方、どなたか分からないのですが、北区に行かれた委員の方、南委員、それで了解でよろしいですか。</p> <p>(南委員) 了解しましたけれども、発言された方にも分かるように、説明していただければと思います。</p> <p>(齋藤議長) 訪問時、インタビューに答えてくれた人がそう言ったわけですね。そちらの方にも修正をしていただくということでお願いします。 それでは (1) 「生涯学習に関する市民意識調査について」、市民アンケートの内容、考察が見えてまいりましたので、まず、今日は中村委員と内田委員からご報告をお願いして、その後、ご質問や意見をいただきたいと思います。</p>																																																		

その意見を集約して、また分かりにくい点など一部修正を行い、教育委員会の定例会にあげて、ご意見をいただく。何とか12月には印刷に入りたいという段取りになっております。

それでは、「生涯学習活動への関わりについて」と「人との関わりについて」、中村委員からお願いいたします。

(中村委員)

それでは、お手元にあるかと思いますが、アンケートの結果報告書というのをご覧いただきたいと思います。私が分析いたしましたところをお話したいと思います。13ページ、調査結果の一番最初のところになりますが、「生涯学習活動への関わり」というところをご覧いただきたいと思います。

まず、生涯学習活動の現状ということで、実施状況を調べてあります。その結果について、55.4パーセントの人が実施していると、その内訳が下に書かれているものになります。55.4パーセントの内訳を見るとこのようになっているということです。

14ページのところに、その内容が文章化されております。約4割の人が、現在、生涯学習活動を行っていないとなっています。最も多いものとしては、スポーツ、レクリエーション、健康づくりに関することが一番目で、次に芸術・工芸に関することとなっております。少ないものとして、下の方にあるのですけれども、福祉に関することであるとか、まちづくりに関することであるとか、人権擁護に関すること、行政が力を入れなければいけないものが回答率は1割に満たないところが、一つ注目すべきところかなと思います。あと、結果・考察のところ、少しご説明いたします。

全体の学習活動の実施率なのですが、新潟市は県の調査、それから全国の調査と比較しまして、割合が高くなっているということが言えます。新潟県や全国の調査では、生涯学習を行っている人が半数に満たないということなのですが、新潟市においては半数を超えているということで、全体像としては、まあまあ全国的にいい傾向にあるということが言えるかと思えます。

あと、それから、内容についてなのですが、全国調査に基づくような結果になっています。全国の方が健康、スポーツ、それから趣味的なものというふうの実施者が多くなっているのですけれども、項目の名前は若干違うのですが、中身的には同じ傾向にあると言えるかと思えます。

それから、年代別に見てみますと、一番多い健康、スポーツに関することというのは、どの世代も多いのですが、2番目に多くなっているのは、20代、30代では仕事上の知識、技能に関することというのが次に多くなっているのですが、40代になりますと、スポーツ、レクリエーション、健康づくりに関することというふうになっているということで、年代によってだいぶ活動内容の違いが見られるということが、結果として出ました。

それから、生涯学習活動の方法についてということで、15ページをご覧いただきたいと思えます。どのような方法で行っていますかということでお聞きしましたところ、次のような結果になっています。一番多いのは、本、雑誌、新聞によって実施しているという人が非常に多いということと、仲間とやっているグループ、サークル、団体などと回答した人は、3人に1人いるというようなことがあげられます。

裏側の方を見ていただきまして、結果・考察なのですが、すべての年代において、本、雑誌、新聞が主要な方法となっております。若年層の20代、30年代では、特にインターネット、携帯電話による実施率が、40代以上の中高年に比べるとかなり多くなっている。40代以上の中高年になると、仲間とやっているグループ、サークル、団体などの実施率が多くなっているというようなことが言えます。インターネット、携帯電話に関して、こちらの方だけをグラフに起こしてみますと、年代による格差がずいぶんはっきり出ているかと思えます。あと、男性、女性でいいますと、女性の方が男性に比べてインターネット、携帯電話を使っているというのは少ないという男女の差もある。年代差、それから男女差があるということが言えるかと思えます。

次に、グループ、サークル、団体などの活動内容というところをご覧いただきたいと思えます。仲間とやっているグループ、サークル、団体などを選んだ人だけを対象に聞いているものなのですが、どんな活動内容なのかということです。一番多いのがスポーツ、レクリエーション、野

外活動という結果になっていて、あと、地域づくり、ボランティア活動と順次できています。

裏側の方を見ていただきますと、仲間とやっているグループ、サークル、団体などの活動内容を地区別にみましたら違いがあったので、そこにあげてみますと、最も高い割合、スポーツ、レクリエーションの野外活動の割合が一番高かったのは北区、それから、地域づくり、ボランティア活動が秋葉区、それから文化・芸術活動は中央区、子育て支援活動、教育支援に関しては東区、それから自然保護、環境・美化活動は秋葉区、技術や資格を身につける活動は西区、歴史・郷土史について学ぶ活動は江南区、それから植樹について学ぶ活動は南区、政治・経済を学ぶ活動は東区というふうに、それぞれの区によって傾向が違ふというふうになっております。全体の平均のパーセントと比べてみますと、その区が一番高くなっているということが分かります。

それから 番目、生涯学習活動の活動場所についてですけれども、何と言っても自宅が多い。次が公共の屋内外施設、民間の屋内外施設云々と続いております。公共の屋内外施設で活動している人も半数程度はいるとなっています。

結果・考察のところをご覧ください。自宅での活動者は20代、30代が多い。つまり自分一人でやっているということは、若年層に特に多いということが言えます。それから50代以上の中高年層では、5割以上の方が公共の屋内外施設で活動しており、公共施設の利用率が高いという結果になっています。若い人は、うちで一人でやっているという状況が見えてくるかと思えます。

それから、利用している公共施設の種類になります。公共の屋内外施設を選んだ人だけを対象にして聞いた質問になります。いろいろな施設があるのですけれども、どのような施設が使われているかということで、一番多いのが生涯学習センター、公民館、学習館、続いて体育スポーツ施設という順番になっています。この二つが一番多いということになります。

結果・考察についてなのですけれども、これも地区別による公共施設の利用の違いが見られました。それぞれの項目で最も高い割合の地区は、次のとおりになっています。生涯学習センター、公民館、学習館については秋葉区が多く、体育・スポーツ施設は北区、コミュニティセンター、農村環境改善センター、自治会館は江南区、南区は図書館、中央区は図書館、芸術文化会館、美術館は西蒲区、それから福祉会館、保健福祉センター、老人福祉センターは秋葉区、小学校、中学校、高校は西蒲区、それから大学、専門学校は西区、博物館、資料館は東区、保育園、幼稚園、その他の子育て支援は秋葉区というふうになっています。それぞれの平均点と比べていただくと、有意にそれぞれの地区が高くなっているというのがお分かりいただけると思います。

先ほどの質問、グループ、サークル、団体などの活動内容の結果と比べてみますと、そこに関連が見えて来るといふか、例えばスポーツ、レクリエーション、野外活動が北区は多かったのですが、そこでは体育スポーツ施設の利用率が高くなっています。それから、地域づくり、ボランティア活動や自然保護、環境美化活動が多かった秋葉区では、生涯学習センター、公民館、学習館の利用率が高くなっています。それから、文化・芸術活動が多い中央区では、図書館の利用率が高くなっていますし、技術や資格を身につける活動の多い西区では、大学、専門学校の利用率が高いというふうになっていて、活動内容と公共施設の利用されている種類には、関連があるということが分かるかと思えます。ただ、この調査結果では、施設が充実しているから活動がそのようになっているのか、あるいはサークル講座が充実しているから、施設の活用率も高くなっているのかということについては、データとしては言えないのですが、それぞれの地区の調査であるとか、先ほどお配りいただいた資料2-1とか、地域の温度差と照らし合わせてみると、もう少し詳しいことが言えるかと思えます。

それから、22ページになります。活動場所の所在地ということになっていて、圧倒的に市内が多いとなっています。特に言えることとしてはあまりないのですが、活動範囲が広いのは男性の方なのかと、県外、市外と答えている人は女性よりも男性が多くて、男性の方が活動範囲が広いということが言えると思います。

番、身につけた知識や技能の活用についてお聞きしました。約3人に2人が自分の趣味に生かしているということで、学習したことが趣味に生かされているという結果になっています。

それから裏側をめぐっていただきますと、年代別に見てみますと、どの年代でも自分の趣味や活動に生かしているという割合が高くなっています。その他のところを見てみると、高齢層、中堅層は、自分の健康づくりに生かしている。それから、若年層の20代、30代になりますと、仕事や就職に生かしている、資格の取得に生かしていると回答しております。あと、団塊の世代なのですが、地域の活動に生かしているという質問に対して、全体の約2倍の20.7パーセントという高い割合を示していたということから、地域の活動にわりと熱心なのかなということが言えるかと思えます。

それから、意向の方です。先ほど一番最初の質問で現状を見ましたけれども、ちょうどそれと対応するような形で、今後の意向について聞きました。やってみたいかどうか、80.4パーセントの人がやってみたいということで、先ほどの55.4パーセントに比べると、今はやっていないけれども、やりたいと思っている人が、結構多いということが言えるかと思えます。内容としては、現状と内容と多い順番はたいして変わらないのですけれども、やりたいということについては、スポーツ、健康づくりが一番、芸術・工芸に関するものは2番目というのは同じなのですが、情報化に関するということが3番目に多くなっています。先ほどのところで言うと、20代のインターネットの使用率が高かったのですが、中高年層でも実施したいという意向を持っている人は、実際はやっていないのだけれども、結構多いということで、学ぶ機会があるといいのかなという気がします。特にないと回答した人では、目標別ではその日その日を自由に過ごすという人、それから自由時間別では8時間以上、時間を書いてある人の方が特にないと答えているのは、おもしろいかなと思えます。

の施策への要望として、市はどのようなところに力を入れるべきかということで質問したのになります。そこにグラフがあるように、利用できる施設の数を増やすとか、講座や行事、イベントを増やすというのが順次多くなっているということで、その二つが要望としては大きいということが言えます。

それから、28ページですが、一方で、リーダーを育成するという声は1割に満たないということで、この会議の中では、リーダーを育てなければいけないという話が結構出ているのですけれども、全体をおしてみると、そう多くないということが言えるかと思えます。ただ、選択した人別で見ると、平日、休日の人別で見ると、福祉・ボランティア活動に取り組むと選択した人に関して言うと、リーダー育成するというのが全体の約2割、それからボランティア活動を支援するにおいては、全体の3割以上の割合を示しており、福祉・ボランティアに実際にかかわっている人にとっては、非常にニーズが高くなっているということが言えます。

29ページの入手したい情報、どんな情報を入手したいですかということでお聞きしたのになります。圧倒的に多いのが、講座や催し物についての情報となっています。

31ページですが、これも目標別で見ると、ほしい情報に違いが見られました。「しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く」を選択した人は、他の目標を持つ人と比べて、講座や催し物についての情報、それから施設の内容の利用方法の情報がほしいと望む傾向がありました。それから、「身近な人たちと和やかな毎日を送る」ということを選択した、そういうことを目標にしている人では、グループ、サークルの活動内容についての情報を手に入れたい。それから「みんなと力を合わせて世の中をよくする」を選択した人は、指導者や講師についての情報、それから活動の相談窓口、ボランティアの活動内容についての情報、それから、市、県や財団からの資金援助の申し込み方法、リーダーについての情報を望む傾向があるということがいえます。それから、「特にない」の項目を選んだ人では、「その日を自由に楽しく過ごす」ということを選んだ人は、25.0パーセントと高い割合になっているということが言えます。

前のお話の中に、広報活動をしっかりやっていく必要があるという話が、何人かの委員の方から出たかと思うのですが、この結果を見ますと、情報を伝える時は対象者がいて、伝える内容があるので、それには関わりがあるといった時に、戦略としてこういう情報をこういう人たちに伝えたい時には、どういうメディアを使うといいのか、媒体を使うといいのかという戦略

的な広報が大事になってくるのかなと、ある程度ターゲット、それから伝える内容を絞って、こういう人たちはこういう傾向があるから、こういうところを使って広報していくといいという戦略が立てられるのではないかと思います。

飛ばして、次に59ページで、その間は内田先生からあとでお話ししてもらいます。59ページで、「人との関わり」という項目になります。年代による人との関わりの現状と意向ということで、現状と意向というものを比べたグラフになっています。こうやって見ていただくと分かるように、実際にいま関わりある年代よりも、もっといろいろな人たちと関わってみたいという希望の方が多くなっているということが言えるかと思います。実際、関わっていないのが27.8パーセントなのだけでも、意向になると11パーセントとなっているということは、関わっていないけれども、関わってみたいと思っている人もいるということが言えるかと思います。

それから、裏側の方を見ていただきますと、それぞれ年代ごとで現状と意向というのを表に表しました。そちらの方を見ていただければいいかと思うのですが、全体として言えることは、小中学校以外の10代との関わりが、現状と意向ともに特に少なくなっているというのが、まず目につくかなと思います。それから、若年層なのですけれども、20代、30代では、関わっている人と関わってみたいと思っている人の割合の差がわりと大きくて、意向はあるけれども、実際には関わりを持っていないという現状があるのではないかと思います。あと、若い人は、いろいろな年代と関わってみたいという意向を持っているということが分かります。

それから、61ページですけれども、どのような人たちと実際に関わっていて、今後関わってみたいと考えているかという、活動上の関係者による人との関わりの現状と意向ということで調査したものになります。こちらの方も、意向の方が高いパーセントになっているところを見ると、気持ちはあるのだということが言えるかと思います。特に何と言っても、共通の興味や目的を持つ人というのが2割以上になっていますので、現状では29.0パーセントと、全体の中では一番多いのだけれども、その倍の6割の人が、共通の興味や目的を持つ人と関わってみたいと思っているということが目にはいるかと思います。どの年代でも共通の目的を持つ人が一番多くて、若い人ほど現状と意向との違いが大きいという姿が、先ほどと同じですが、見えてくると思います。20代において、共通の興味や目的を持つ人との関わりの実際の割合は、21.2パーセントと一番低いにもかかわらず、意向においては71.2パーセントと、実に7割という高いことを示しているということは、関わる機会をいかに提供していくのか、特に若い人、一人で自宅でやっている人が多いというのも、前の調査からも出てきたので、若い人たちをいかに引き出して、同じ目的の人たちと活動できる機会を提供できればというのも、一つあるかなと思いました。以上です。

(齋藤議長)

それでは、内田委員、お願いします。

(内田委員)

31ページをご覧ください。私が担当したのは、社会活動への関わりということで、第1項目と性質が少し違うのですけれども、学校訪問についての質問が一つ調査票にありまして、それについての回答結果から見ていきたいと思います。

趣旨としては、多分学社民の融合というのが、教育ビジョンにとってもスローガンに掲げて、非常に重要な課題なわけですけれども、それについて現状はどうかというのを確認する上で役に立つのかなと思っています。

実際、去年の1年間に学校へ行ったという人は3割くらいで、その人たちがどういう目的で学校を訪問したのかという内訳が31ページ、これは単純集計で出ています。複数回答でいくつか書いてもらっております。そうすると、圧倒的に学校行事のためという用向きの回答が多い。その他も授業参観とか個人懇談とか、主に自分の子ども、親族が学校に通っていて、その用事で学校に行っているという感じなのです。私のところでは選択肢がすごく多くて傾向が見にくいので、もう少しざっくりと分類をしてみようということで、32ページの図の2-1を見ていただきたいのですけれども、これは該当するすべての回答者の複数回答になるので、ある人がこの項目に をつけたりとか、

これとこれに とかというパターンがあると、たくさんのデータを集めてくるので、それを元にして同じような人が をつけている項目が、だいたい同じ仲間になり、似たもの集め、似たもの探してみたいなことをやる分析をしてみた結果が、縦横の軸の空間に描かれてあります。だいたい同じ区画に入っているものが似たような傾向を持つことが をつけている、選択肢項目として似た者同士だというふうに見ていただければいいと思います。

それで、学校訪問の目的については、学校の主たる活動目的である教育活動と授業とかに直接関わるといえるような用向きで行っているかどうかということが縦軸、間接的、直接的になっていて、自分の子どものことに関わる用向き、あるいは自分自身が何か用事があって行っているという話なのか、それとも何かもう少し社会的な活動のために行っているのかということで、横軸の方は私的交流というふうな用向きの性質を分けてみると、こんな感じになりますよということです。先ほどの単純集計結果で、学校行事とか授業参観とか、非常に回答率の高いものは、授業との関係は間接的で、私的な用向きという性質の訪問目的に分離されているということが分かります。ここのところの回答率が高いです。つまり多くの方は、当然ですけれども、学校に行く場合、保護者として訪問しているということが一つ分かります。

それからもう一つは、地域行事とか非行防止活動というのが左上の区画に入っていますけれども、これは地域行事は後にも出てきますが、自治会ないし町内会が主体となって行っている活動の場として、学校という空間を使っているというケースだと思うのですが、これもそれぞれ回答率があります。地域行事のためというのが回答率がそれぞれあります。要するに、ここまで回答率の上位を占める訪問目的というのは、自分の子どもとか親族が学校に通っていて、その保護者としての用向きで学校に行っているというのが一つと、もう一つは、地域の様々なイベントが学校を舞台に展開されているので、ここに行っているという人と、その両者が学校訪問目的の上位を占めている。左下の区画なのですけれども、これはボランティア的な関わりで、学校の教育活動を補助するような活動に分類されるものなのですけれども、この区画に入っている項目の回答率は、どれも極めて低い。だいたい1パーセントから6パーセントの間に入っていて、あまりこういう目的で学校を訪れる人はいないということが分かるということになります。

そうすると、どういうことになるのかということですが、まず右上の区画の目的で、つまり保護者としての訪問ということであると、主には子どもを持っている女性、具体的には33ページに書いてありますけれども、30代、40代の女性の回答率が高い項目になっていて、他方で、地域行事とか非行防止活動という地域用事絡みの活動は、60歳代と70歳代以上の男性の回答率が高いということで、中堅層の女性が保護者としての訪問が主体で、高齢層の男性は地域行事目的で訪問していて、その両者がどう関わっているかということになると見えにくいというか、両者はどういうふうにつながっているのかということを見ると、見えにくいような結果になっています。おそらく地域の人と保護者の人をつなげるような、両者を結びつけるような役割を期待されているのが、左下の区画にあるような活動だと言うことで、まだ導入されて日が浅いということもあって、定着しているという状態には、現状では立ち至っていないということが分かります。これが、学校訪問についての分析結果です。

それでは、34ページです。今度は、社会活動への参加状況というのをこれから以降見ていくこととなりますが、ここでは四つの項目に分けて、社会活動参加への全体的な状況を見ていくことになっていて、34ページの一番上のグラフを見てもらうと、これまで参加した経験があるかないかという話と、これから参加する意志があるか、ないかという二つの質問への回答結果をまとめて提示しているところですが、参加経験があるという人は、具体的には選択肢項目の一つ以上に をつけて、それが「特にない」とか「参加したことがない」という項目以外のところに をつけた一、あとは未回答の人、すべての人をかき集めて割合を出すと54.5パーセントという形で、「参加するつもりがある」という人も、一つ以上参加したい活動をあげた人を集めて、7割ぐらいの回答率になりますよということが示されていて、その下のグラフは、具体的な活動分野別に、「どんな活動に参加したことがあるのか」というのが左側で、「これから先、どんな活動に参加してみたいと思って

いるのか」というのが右側というふうに見ていけばよい、活動分野別に見たものを表しています。これは回答制限がなしの複数回答なので、つけたい人は全部に をつけてもいいという形で、このような結果になっています。ざっと見ていただくと、こんな感じです。

活動経験率、参加した経験がある活動分野でいうと、これは地域行事に関わる活動が圧倒的に多数を占めているということです。それから、参加してみたい活動ということで言うと、健康づくりに関わる活動の回答率が半分近くで、かなりの人が関心を持っているということが分かります。

めくっていただいて、36 ページから四つに分けて参加状況の全体像を見たわけですが、まず、一つ以上の活動分野に参加した経験を持っている人たちは、どういう人たちなのかということを見ていきます。年齢層別に見ると、だいたい高齢層の方が参加経験率が高く、若年層の方は低い。今回の質問の形式は経験を尋ねているので、人生経験が豊富な人の方が、長く生きていくの方が、参加経験を持つ機会が多かったであろうということ、ある程度見なければいけないということです。

業種・職種別に見ると、自営業種、学生層で参加経験率が高い。学生の内訳を見るとほとんどが若年層なので、学生というカテゴリーの人々というのは、全体的に経験率が低い若年層の中では、かなり積極的に参加機会を活用している層だということが浮き彫りになっています。

それから、次も注目したいポイントなのですが、世帯構成別で見ると、一人暮らし、単身世帯、単独世帯の人で、参加経験がない人の割合が顕著に高いという結果になっていました。一人暮らしの人の年代層別の分布を見ても、別に若年層に偏っているわけではないので、これはやっぱり年齢ではなくて、単独世帯という生活形態の効果は、何らかの形で表れているというふうと考えられます。この件は、後で少し触れたいと思います。

それから、中村先生も何箇所かでお使いになっておられましたけれども、今回の調査では、全体独占質問のところ、生活目標について単独回答で尋ねている質問があるのです。これはNHKの実施している調査を使わせてもらって、四つの生活目標の中で一番あなたに近いものは何ですかということで、その日その日を自由に楽しく過ごすというのを「快志向型」として、しっかりと計画を立てて豊かな生活を築くというのを「利志向型」と名付けて、身近な人たちと和やかな毎日を送るというのを「愛志向型」として、みんなと力を合わせて世の中をよくするというのを「正志向型」というのですが、この四つからすべての回答者の人に一つを選択してもらいました。その対象への結果別に参加経験率を見てみると「正志向型」、つまり、みんなと力を合わせて世の中をよくする、「世直し型」とも言われるのですが、世直し型の回答者で参加経験率が顕著に高、7割を超えているという結果になっています。ただし、このグループは、全体の中では、全国調査では5パーセント程度ですが、今回の調査では、6パーセントのシェアしかないということも踏まえて見ておかなければならない。

それから、時間のことが気になりますけれども、時間のゆとりと活動の状況の関連で見ると、平日と休日それぞれ自由に使える時間の結果と参加経験率で見ると、ほとんど差がないということです。長々と時間を持っている人も、ほとんど時間を持っていない人も、参加経験率を見ると差がない。ここでは時間のずれというのがあって、参加経験を過去も含めて聞いたものだし、他方で、自由時間というのは現在の状況、調査実施時の状況を聞いた質問なので、ずれがあることが考えられるから、この結果だけから早急に時間的なゆとりと活動経験が無関係だとまでは言えないけれども、この問題はいろいろところで登場するので、時間がないという回答は、実際にその人の生活実態から見て、本当に時間がなくて忙しい毎日を送っている人たちの回答なのか、それとも主観的な多忙感、同じ自由時間があっても、忙しい忙しいと言いがちの人と、それを言い訳にしがちな人と、そうでもない人分けられると考えられるので、忙しいという回答が、主観的な多忙感のことを反映しているのか、それとも実際の多忙さを反映したものなのか、よく考えてみる必要があるかなということ示唆していると思います。

の参加意志の方ですが、これから参加してみたい活動を尋ねて、少なくとも1個以上をつけた人をすべてかき集めていて、1個でもつけている人は参加意志がありと見ます。参加比率

を見ると、男性よりも女性がやや高いとか、年代層別では、参加経験と逆に20歳代で80パーセントの人が参加してみたいというのが一つあります。逆に高齢層にいくと、参加意志率が下がるという傾向があります。それから、学生を見ますと、9割以上は参加してみたい活動を1つ以上あげているということ結果になりました。それから、世帯構成別に見ると、参加経験で見ると、一人暮らしの人の参加経験率が低かったのですが、してみたい活動ということで聞くと、ほとんど参加意志の状況に差がないという結果で、一人暮らしの人でも、7割以上の人が参加したいという活動をあげているという結果でした。若年層とか単身生活者というのは、参加経験率を見ると低いだけでなく、参加する意志がないかということ、そうでもない。その人たちの参加意志をうまく実際に参加できる状況と結びつけることができれば、参加経験率全体の底上げが見込まれるのではないかと思います。

それから、時間の話をここでもしたいのですが、平日と休日の自由時間別で参加意志率を見た結果、どういうことが言えるかということ、平日、休日のどちらについても、自由時間の長さで参加意志の高さにはあまり差がないという結果でした。参加意志の部分というのは、時間的な余裕があるか、ないか、時間的な余裕が多いか少ないかということと、ほぼ無関係であると言えるかと思います。

それから、参加経験と参加意志、これまで参加した経験を尋ねた結果と、これから参加してみたい活動を尋ねた結果の関連というものも見ておきたいのですが、ここでは、これは全部複数回答で答えていますので、参加したことのある活動がいくつあがっているか、一人一人の回答者がいくつあげているかという結果と、参加してみたい活動をいくつあげているかという結果は、すべて複数回答の数ということで出てきます。それで見ると、参加したことのある活動分野数と、参加してみたい活動分野の数の相関を見ると、有意な正の相関がある結果になりますので、これまで様々な活動に参加してきた経験を持つ人の方が、これから参加してみたい活動をたくさんあげているということが分かったということです。

生涯学習活動との関連を見てみたのですが、実施している生涯学習活動の分野の数と、参加したことがある活動、あるいは参加してみたい活動の数を見てみると、どちらも相関係数は正の相関が認められるという結果でした。つまり幅広い分野の学習に取り組んでいる人は、経験した社会活動の分野数も多くて、これから参加してみたい社会活動分野も多いという傾向になっているということで、両者は関係していると思います。

38ページです。今度は、参加経験について、個別の活動分野別の回答傾向を見ています。10種類の社会活動分野の選択肢をあげているのですが、それは先ほどの学校部門と同じやり方で分類してみた結果が、図の2-2です。これは解釈に困る部分もあるのですが、名前としては横軸の方は、その活動が地域に根ざしたような特徴を持っているものなのか、地域という空間を越境したような、ここでは普遍とあえて名付けてありますけれども、もう少し広い目標とかを掲げているようなタイプの活動なのかということで横軸に分けて、縦軸は先ほどの生活目標のところであげたような、どちらかと言うと、自分の充実というか、自己実現とか、そっちの方を志向するタイプの活動をカイリ志向型と名付けて、もう少し愛他的なというのですか、世直しの志向性を強く持っているものをアイセイ志向型の活動と名付けて、4分類してみた結果が、これです。実際には、三つの枠に収まっているわけですが、まず、左下の区画から見ていきたいのですが、ここに入っているのは地域志向型で、アイセイ志向型の活動、中身を見ると、地域行事とか防犯・防災、交通安全、環境美化とか災害復旧・救援への支援、これはほぼ地域の自治体とか町内会を基盤として、拠点として展開されている活動日とすることができる。これは、この左下の区画の活動分野の参加率は高いです。

それから、右上の区画はそれと対局になるのですが、健康づくりと文化と入っていますけれども、心身のメンタル、フィジカルの自己充実とか自己実現を追求していくような、地域に縛られないという意味で普遍型で、それから快志向型の活動というのがあるとみたのですが、こちらの参加経験率は単純集計の結果をみると、比較的高いです。

それから、右下の部分ですけれども、ここは人権擁護とか障害者、高齢者福祉、国際交流が入ってくるのですけれども、これらは普遍志向型で、世直し志向型、アイセイ志向型に分類できる活動ですけれども、どちらかと言うと、これらの三つの活動分野への参加経験率は低い、中でも障害者、高齢者福祉は2割程度ですけれども、他は結構低い結果になっていて、この区画は世直し志向型であるという意味では、地域拠点型の自治体とか、町内会に拠点の活動と共通しているのですけれども、町内会という地域集団のベースがない状態で展開されている活動というのは、参加率で見ると結構差が出てくるなど、つまり、地域拠点型の活動の方は、参加率は顕著に高いという傾向があるということが分かります。

次なのですけれども、以降はこの調査結果をいろいろ眺めていって、横断的に見ていって見えてきたことをまとめて書いているのですけれども、様々な集計結果を見ていくと、参加経験率が高いグループが浮き彫りになってきていて、それは何かというと、以下に述べる人たちなのですけれども、まず生活の基本別に見た時には、みんなと力を合わせて世の中をよくしていこうという世直し志向型、正志向型の回答者は、すべての活動分野について参加経験率が顕著に高い傾向がありました。すべての活動分野ということは、先ほどの左ページの分類で言うと、それを全部含むという形で、この正志向型の回答者たちというのは、いろいろな地域志向型であれ、普遍志向型であれ、ともかく世直しを目指した活動に積極的にコミットして、その一方で健康づくりとか、文化・芸術活動にも熱心な、その面についてすごくアクティブなグループだということが、どうも言えそうだということです。

それからもう一つ見つけた形というのは、平日、休日の自由時間の使い道というのも属性質問で聞いているのですけれども、その回答結果との関わりが出てくるのですが、平日、休日のどっちについても、空いた時間を近所づきあいとか、町内会活動に使っている人たちと、それから福祉・ボランティア活動に取り組んでいる人たち、そう答えたグループは、ほぼすべての活動分野で参加経験率が高いという傾向がありました。この人たちも非常にアクティブな社会活動参加層を形成しているということが、どうも言えそうだということです。

それから、自由時間の使い道で、もう少し細かく見ていくと、福祉・ボランティア活動に自由時間を使っている人では、そうでない人と比べた場合に、近所づきあい、町内会活動に従事している人の割合も有意に高いという結果が出ました。つまり両者は、オーバーラップしているということです。

それから、生活目標との重なりを見ても、正志向型の生活目標を掲げる人というのは、全体でも6パーセントしかいなかったのですけれども、これらのグループの中では結構シェアが比較的高いということがあって、近所づきあい、町内会活動に平日、休日に従事している人は、それぞれ15パーセント、20パーセントの人が正志向だし、福祉・ボランティア活動では、平日の人で18パーセント、休日をそれに使っている人が同じく18パーセントということで、全体の6パーセントから見ると、かなり正志向型の場合は高い。この三つのグループというのは、重なり合っているということが言えそうだということです。今、述べた三つのグループの回答者全体でのシェアはすごく小さいですけれども、それぞれの活動分野におけるリーダー層と言っているのか分からないですけれども、少なくとも精力的に取り組んでいる人たちというのを数多く含んでいる、そういう層であると見ることができると思います。これは表2-1で、その人たちの年齢層別のシェアを見ているのですが、こうしたアクティブ層を比較的含んでいるのは、50歳代以上の年齢層に限られているということが分かるかと思えます。生活目標の「正志向」でもそうだし、平日の自由時間を救援活動に使っている人もそうだし、福祉・ボランティア活動に使っている人もそうだし、それから休日の自由時間を近所づきあい、町内会活動に使っている人も、50歳代以上のところでシェアが大きくなるということが、はっきりと分かります。

40ページですが、こうやって見てくると、地域志向型の活動と普遍志向型の活動の担い手というのは、地域行政に活発に関わっている人と、それから福祉・ボランティア系の活動を展開している人たちというのは、だいたい別々のグループというのではなくて、離れている部分が結構あるのだ

ろうと、もう少し具体的に見ると、自治会とか、町内会に拠点を置く活動に熱心な人たちの一部に、普遍志向型の活動にも積極的に関わっていくような人がいるのではないかとということが浮かび上がってきたということで、こうしてみると、社会活動全般の参加経験の豊かさみたいなものが作用するのが、どうも近隣関係に関わる活動への参加状況であるということが言えるのではないかとということで、半数以上の方が地域行事に参加した経験があると答えていますけれども、地域行事という活動分野に次にスポットをあてて見てみたいと思います。

まず、地域行事に関わる活動への参加経験率を性別に見てみると、女性よりも男性が高く、年齢層別では40歳代と50歳代が高い。反対に若年層は低調で、20歳代は結構低い。これは参加経験率全体の傾向ともオーバーラップしています。世帯構成別に一人暮らしを見ても、地域行事への参加経験率は目立って低い結果でした。単身生活者の人たちですけれども、この人たちは参加経験率は全体に低いのですが、その理由は、多分一人暮らしの人は、二人以上の世帯で暮らす人と比べて近隣関係でとっかかりが少ない分だけ、自治会や町内会活動に関与する機会が少ないということがあって、地域活動を足がかりにして他の活動に参加していく機会に乏しいのではないかと、つまり近隣関係という人間関係資本に乏しい分、いろいろな社会活動に足がかりを持っていく機会に乏しいと言えるのではないかとということです。

それからもう一つあるのですけれども、地域行事に参加経験があると答える人たちは、他の分野での参加経験者に比べると、地域行事以外の分野の活動に参加していない人が多いということです。そういう見方もできますし。参加経験者それぞれについて、参加した活動分野数というのも出せるのですけれども、それを見てみても、平均値を見ると地域行事、参加経験者の平均の活動分野数も、小さい値になるということが、これは表2-2にあると思うのですけれども、出ています。平均してみると、これも結構有意差が出てくるということで、逆に人権擁護活動というのは、平均の参加経験のある活動分野数も大きな平均値になるということで、つまり地域行事に関わったことがあると答えている人たちの中には、一部に先ほど述べたようなアクティブ層が含まれているのだけれども、他方で、順番に割り当てられた役回りがきたから、それをこなしておこうという程度の範囲に止まっている人も、かなりの数値を出しているという連続性があるのではないかなと。

4番、これは参加意志の方ですけれども、参加してみたい社会活動分野です。同様にパターン化するとこんな感じになって、先ほどとほとんど同じなのですけれども、地域行事だけは左上の区画に移っています。その辺はそこに書きました。参加してみたい活動で、健康づくりを見ると、これは高齢層の回答率が高い、これは予想がつくということが一つと、それから団塊の世代の回答率は、ここだけでも顕著な数値を出していますけれども、団塊世代の回答者は、いろいろな分野について参加意志を持つ人の割合は、前後の年齢層と比べても顕著に高い結果になっています。ここは、掘り起こしの効果が結構見込めるグループだと言えそうです。それから、先ほど述べたようなアクティブ層の人たちは、参加意志率も非常に高いという傾向がありました。

次に参加経験、活動に参加した経験がこれまでにない人に対して「なぜですか」と聞いた結果、複数回答で答えてもらったのですけれども、これを単純集計で見ているのが42ページです。こういうふうにしらない理由を聞くと、時間が足りなかったとか、時間が足りなくなったというのが、だいたい回答率ではトップにくる。これは、前回の調査の時も同じでしたけれども、ここでは実際に時間不足というのを特にいっているのです、実際にそういう人たちは時間がないのか、あるのかということを確認してみたら、確かに平日とか休日の自由時間が1時間未満だとか、要は1時間以上2時間未満の層であるとか、この人たちでは、時間不足をあげる人たちが確かに高いという傾向があります。この場合、実際の生活の多忙さが、時間不足を意識する傾向につながっているということが言えそうだとということです。

その2の4のタイトルが間違っているのを今発見しましたが、43ページの図の2の4は、活動参加経験がない理由の分類です。四つの区画に分けると、こんな感じになるということで、横軸は、右にいく方が社会活動自体への距離感が大きい人がこっち、さほどでもない人が左側というふうに横軸を意義づけて、縦軸の方は、その理由が個別の事情に起因するものなのか、それとも、自分で

はどうしようもない環境的なものなのかということで、環境別要因と個人的要因というふうに縦軸の方は意義づけてみました。

44 ページですけれども、社会活動そのものに距離感が大きい人、つまり自分にとって必要なものではなかったとか、興味や関心がなかったといわれる人は、そこそこおられる。当然ながら、これらの二つの回答をしたグループでは、参加したい活動をあげた人の割合も低い傾向がありました。その他の活動そのものに対して距離感がないという人たちの理由付け、その持つ意味合いは、縦軸の方で見ていくといいのではないかと、つまり、それは個人的な要因をあげているのか、環境的な要因をあげているのかということですが、個人的な要因という理由付けでは「時間の不足」、「世話が必要な家族の存在」の回答率が高い。一方で、情報とか活動とか、活動仲間、それから活動が分からなかったといった、これはどちらかということ、自分ではどうしようもない環境的な要因に分類しましたけれども、こちらをあげる人もかなり多い。これは単純集計の結果を見ると読み取れるわけです。

そうすると、言えそうなことは、社会活動への参加の阻害要因をどう除去していくかということを考える手がかりになると思いますけれども、ハードルを下げる方策というのは二つの方向を見て展開していくことが有益であると言えそうだとということで、一つは、感情的な阻害要因の除去、これについては、情報や仲間や場が足りないと言っているのだから、そうしたものを見直して、直接的に対応していくことが有益であろうし、個人的な要因については、直接阻害要因除去に関与していくのはなかなか難しいですけれども、ただし、育児とか介助を支援するサービスを今以上に提供することによって、間接的な形で参加率の底上げを助けていくという方策をとることも有益ではないかと言えそうです。

それから、理由別にもう少し詳しく、性別にやめた理由の傾向を見ていくと、時間不足をあげた人は40歳代、50歳代の男性が高く、他方で世話の必要な家族をあげた人は、30歳代をピークに60歳までの女性で高いというふうに、ここに年代ギャップが出ています。それから、活動仲間がいないとあげた人の割合の高いのは60歳代の男性、それから情報不足の回答率は20歳代の男女、それから60歳代の男性、そして一人暮らしの人たちに多い。それから、参加意志の有無等も見えますけれども、個人的な要因ではなくて、環境的な要因を理由にあげている人たちの参加意志率が高い傾向があります。情報とか仲間とかを理由にあげた人たちの間では参加比率が高いので、これはどういうことを意味するかということ、こういう人たちの参加意志を生かすためには、環境的な要因への手当が有効だろうということが示唆されていると思います。

活動に参加したきっかけについての回答ですけれども、45 ページを見ると分かりますけれども、頼まれたからやっていますという、ボランティアではないきっかけがトップにくる傾向があって、これは前回と変わらない傾向です。依頼されたからやると、これがきっかけで活動に関与することになりましたという回答結果になっています。

めくっていただいて46 ページは、これもきっかけを4分類してみたのですが、横軸は受け身のきっかけか、自分から働きかけたきっかけかということを表しているというふうに読み取って、縦軸の方はきっかけが一段階的か多段階的かと書いていますけれども、これは例えば何の前触れもなく、誰かに頼まれたから始めたというのが一段階的だということに見えて、多段階的というのは、その活動に関わる前までの人生の様々な経験とか、交友関係とかが何らかの形で合わさって、きっかけを形成しているという場合が多段階的というふうに呼んでいるものです。そうやってその二つの軸で分けたものが、こんな感じだということです。回答率が最も高かった地域や団体からの依頼というのは、この分け方を見ると、いきなり一段階的なきっかけで、しかも受け身型ということになります。ポスター、チラシ、広報紙とかメディアインターネットをあげた人たちというのは、いきなりという意味では依頼と同じなのだけれども、普通は自分からアクセスして情報を求めているという意味で、もう少し能動的な性質を持っていると思います。

一方で、生活上の様々な体験をきっかけにしている多段階的な契機としては、つまりそれ以前の学校生活、交友関係とか自分の介助体験とか、そういうものがきっかけになっているものとしては、

団体・グループ活動、友人からの勧誘、講座の受講、介護・支援体験、学校での経験というのがあげられるだろうと。これらはその分類で見ると、能動的な方に入っていくことになります。

活動分野別の傾向を見ていくと、まず、講座の受講とか、団体別活動をあげている人たちというのは、どういう活動分野の経験を持っているかということ、文化・芸術活動、健康づくり、障害者・高齢者福祉、人権擁護、国際交流というふうになってきます。この意味は、講座の受講とか団体・グループでの活動がきっかけになって活動を始めているということで、生涯学習活動の延長線上で展開されている活動分野という性質を持っている、そういうタイプの活動分野であるということが言えるということです。

平日、休日の自由時間、先ほどのアクティブグループですけれども、アクティブ層の人たちというのは講座の受講、団体・グループ活動をきっかけにあげている人たちの割合が目立って高い。つまり、この人たちは、生涯学習活動の経験を社会活動へと展開していくような志向性を明確に持っているグループとみることができるのではないかと。それから、介護・支援体験がきっかけになっているという回答率が高いのは、障害者、高齢者、福祉、人権擁護、国際交流、先ほどの分類でいうと、普遍型プラスアイセイ志向型の活動分野と言えます。

その一方で、地域や団体からの依頼をあげている人の割合が顕著に高いのは、これははっきりしているのですけれども、先ほどの分類でいうと、地域拠点型の活動、地域行事であるとか学校支援、青少年育成とか、防犯・防災、交通安全、災害救援等々、これらの中で人権擁護をあげると、すべてが活動分野の分類でいうと、地域志向型で、かつアイセイ、世直し志向型の活動ということで、自治会とか町内会にベースを持つこのタイプの活動経験者では、それ以前の生活とは関係なく、頼まれたからという形で、情的なきっかけで活動に関与することになった人が活動しているということが、はっきり分かります。

48ページです。活動を展開していくうえで役に立ったことを尋ねたのがこれで、ここでは「特にない」という人が結構いることに注目したいのと、あとご覧の通りです。この質問の内容を、活動をやっていく上で役立ててきた知識や情報のソースというふうに言い換えられるだろうということで、そういうことに基づいて回答パターンを分類したら、図2-6のようになったということです。縦軸は知識、情報を手に入れるときの場面が、誰か大勢の人と一緒に、それとも一人一人別々ですか、集合的か孤立的かということを表していて、横軸は知識、情報の性質が、ここで汎用といているのは、一般にいろいろな場面で適用可能性を持っているような知識、情報のことを言っていて、情報……的というのは、その場面、その状況では、非常にそこを切り抜けるのに有効な知識、情報を指しているということで、汎用的と情報……的というのは横軸の意味として読み取りました。例えば自分の活動経験とか活動仲間からのアドバイスをあげているのは、具体的な状況への適合性が高い、そうした知識、情報に有益さを見い出してきた人たちで、他方で、右上の区画の方ですけれども、講座とか講習会とかをあげている人たちは、広い使い道を持つような様々な分野の適用が可能な知識や情報に意義を見いだしている人たちというふうに考えられます。これらの二つのタイプ、左下の区画と右上の区画のどちらのタイプの知識や情報が役立てられているかということを見ると、活動分野の違いは見られませんでしたということです。例えば文化・芸術とか学校支援とか、そこにあげているような活動分野の経験者では、講座が役に立ったという人もいるし、自分の活動で得た経験が役に立ったという人もいるし、回答率はどちらもあまり変わりません。つまり知識、情報が有益だと評価される方は、活動分野の属性で決まってくるというよりは、参加者個人の志向性みたいなものが大きく噛んでいるのではないかとということです。

ここでむしろ注目したいのは、「特にない」というところですが、地域行事とか防犯・防災、交通安全といった自治体、町内会拠点型の活動の経験者で、「役に立ったことは特にない」という回答の割合が顕著に高いということです。つまり、こうした地域拠点型、町内会・自治会拠点型の活動では、知識、情報獲得行動との結びつきが、他のものと比べると薄いということが言えそうだということです。ここで言い換えていますけれども、つまり、こうした活動というのは、広い目で見た学習活動との結びつきが希薄であるということが言えると思います。

メディアは、49ページの図ではインターネット、マスメディアというのは、右下の区画に入っていますけれども、この二つを見ると、単純集計を見てもらうと分かるのですけれども、インターネットよりも新聞、雑誌、テレビ等の既存のマスメディアが役に立ったと答えている人の割合は高いです。ただし、若年層では、インターネットで役に立つ情報が入手できたと答えている人が結構いるので、この場合、インターネットに意義を見いだす層も膨らんでいるかもしれないということです。それから50歳代、60歳代の女性では、市や県の主催する講座が役に立ったと評価している割合が、年代層別に見た時に目立って高いという傾向がありました。アクティブ層の回答率を見ると、いろいろな情報ソースを有益であると評価していて、この人たちは様々なチャンネルを通してどんどん新しい知識とか、情報を獲得しようという志向性が高い人たちだということが基本になっています。

51ページ、活動の継続状況です。継続率は51ページに載っているように、4割くらいの人が続けているということです。やめた人は3割くらいで、あとは一時的に休んでいる人が2割ちょっといるということです。年齢層別に見ると、活動を継続していると答えた人の割合は高齢層で高い、60歳代、70歳代で5割近くの人が続中という回答になっています。逆に継続率が低いのは20歳代の特に女性で、継続している人は2割に満たない。同じ20歳代の女性だと、すべての活動をやめたという回答が半数になっています。男女別では、男性の方が女性よりも継続率が高いということでした。

分野別の継続率を見てみると、先ほどの分類で普遍型というところで、普遍志向型というふうに分類した部分で、人権擁護、国際交流で継続率が高い傾向がありました。ここでは時間の問題にこだわっていますが、自由時間との絡みでいうと、休日の自由時間が1時間未満しかないという層では継続率がやや低いのですけれども、それを除くと、自由時間の高と継続率にあまり大きな関連はないということです。今現在、何らかの活動に参加している人からすると、時間的な余裕があるから継続できるとか、ないから休止・停止だというようなはっきりした分岐は見られなかったということです。その後にもう少し時間の話を書いていますけれども、飛ばします。20歳代の女性が継続率が低いのは、取り立てて彼女たちが忙しいわけではないと書いてあります。平日、休日の自由時間の使い道でアクティブグループを見ていくと、アクティブグループは非常に継続率が高いということが分かって書いてあります。

次に53ページで、活動をやめている、中断、やめた理由については、単純集計結果が53ページに出ています。やはり時間が足りなくなった。時間が足りなくなったということを理由にあげた人の回答率を自由時間別に見てみていくと、平日では下がっているのですけれども、平日の自由時間が1時間未満と1時間以上2時間未満では、時間の不足という回答率が高いので、休日というよりはむしろ平日忙しい人は、活動継続を阻害する要因として、時間の不足を意識する傾向がある。年齢層別では、時間の不足をあげる人は20歳代の女性に多い。それから高齢層では、体への負担がきつくなってきている理由をあげている人が多くおられると。それから、世話の必要な家族がいるからという理由をあげた人の割合が高いのは、これもある程度予想した傾向だと思えますけれども、30歳代の男女、50歳代、60歳代のという結果でした。

社会活動にこれまで参加した経験がないという人があげた理由と、この人たちは参加経験者で、今住んでいるという人たちですけれども、その休止・停止理由との違いというものを見ると、活動未経験者の多くがあげているのは、情報とか場が不足しているといった環境的な要因であることが多いのに対して、参加した経験はあるけれども、今は休んでいる、やめたという人たちでは、体への負担とか家族の問題といった個人的な事情が、回答率の上位を占めているという傾向がありました。これは条件のところでも再度、また出てきます。

それから、参加してみたい活動をあげた人の割合は、参加未経験者が64パーセントであるのに対し、それよりも10ポイント近く休止・停止の人の方が高い。休止・停止別に見ると、活動のための情報、意見や考えの不一致、時間、世話の必要な家族、活動の場をあげた人たちで、参加比率の高さが目立つということは、これらの阻害要因をうまく除外できれば、活動再開できる条件は多少整

っていくことが見受けられます。

最後、活動参加の条件で、まず単純集計の結果が 54 ページに出ています。予想通りというか、時間のゆとりがトップにくるのですけれども、健康、体力、仲間、友人という順番になっています。

56 ページを見てください。やっぱり回答パターンで分類を見ると、こんな感じになります。ここでは、横軸の方は活動に直接かかわるような条件か、それとも間接的な条件かということで分けて、縦軸の方はその条件の整備が、自分一人でやる程度できるか、それとも自分一人では困難だということで、縦軸の意義付けをしてみました。そうするとこんな感じで四つの区画に分けられるということです。回答率が高い、時間のゆとりとか健康、体力とか、仲間、友人、家族の協力というのは、自力での整備がどちらかと言えば可能な条件に位置づけられることが分かります。次いで回答率が高いのは情報ですけれども、これは自力での整理が困難な条件に意義付けられるのではないかと思います。つまり情報というのは、自分でどうにかしようというよりも、自分で情報を発信しようと思っても、何も手がかりがないから無理だということです。活動費用、コスト、活動の場をあげる人も、そこそこおられると。

属性別に回答傾向を見ると、比較的若い層では時間のゆとりを条件にあげる人の割合が高いです。それから、平日の自由時間が 1 時間未満とか、1 時間以上 2 時間未満の層でも、時間の回答率はやはり顕著に高い。それから、これに関係すると思うのですけれども、20 歳代から 40 歳代までの層では、勤め先の理解や協力をあげる人も目立ちます。勤め先の回答率は、平日の自由時間が乏しいグループでも高い傾向でした。それから、若年層については、20 歳代の人で活動のための情報とか、活動の場をあげる回答の割合が高い傾向もあります。これは先ほど 20 歳代で活動未経験の人に聞いたところ、不参加理由に情報不足をあげる割合が高かったということとも対応していることとなります。つまり、若年層にアピールするような情報発信のやり方を探っていくことが、参加率の向上にとっては関わりになってくるということです。

それから、男女差で目立つのは家族の協力で、30 歳代から 60 歳代の女性の回答率は、家族の協力という項目で見ると高い。これは同じ層の同じグループの女性たちで、同じ年齢層の女性たちで、活動に参加したことがない理由とか、活動を休んでいる、やめている理由として、やっぱり世話の必要な家族の存在をあげる人の割合が高いということと符合する結果でしょう。この年齢層の女性たちは、活動に参加する際に、家庭内とか家族内の様々な事情に配慮しなければならない立場におかれているということがうかがえます。それから、20 歳代と 30 歳代の女性を見ると、保育・託児の場合をあげている人の割合も比較的高い。これも、家族の事情ということと関わってくるのではないかと思います。

一方で、健康、体力を条件としてあげるのは、高齢グループに比較的多い。アクティブ層というのは、ここでもすごくて、独特の回答傾向を示していて、いろいろな項目について条件としてあげているのだけれども、アクティブ層の人たちは時間のゆとりというのを条件にあげる人の割合が、逆に比較的低い傾向があります。どういうことか考えてみると、熱心に活動している人たちにとって見ると、活動のための時間というのは誰かが与えてくれるというよりは、むしろ捻出するというか、自分で作り出すようなものというふうにとらえられているので、時間のゆとりというのが条件として重要視されていないのではないかと思います。

それから図の 2 - 8 に、これまで社会活動に参加した経験がある人とない人で、参加のための条件がどんなふう違うのかということと比較しているグラフを書きました。参加経験者の回答率が上回っている項目として、つまり左側の方の回答率が上回っている項目としては、力量向上の機会、活動仲間、友人、健康、体力、家族の協力というのがあげられるし、他方で参加したことがない人があげている条件で、参加経験者に対して上回っているものとしては、情報がないということです。つまり参加した経験のある人が整備を望んでいる条件というのは、どちらかと言うと、自分で整備することが可能なものとだいたい合致していますし、逆に参加未経験者の人たちがあげている情報というのは、自分では整備困難な条件にあげられます。この傾向は、参加した経験がある人というのは、社会活動を続けていくために出されるべき、わりと個別的、具体的な条件をあげている傾向

があるし、参加した経験がない人は、活動を始めるためのとっかかりになるものとして、情報という回答率が高くなるという傾向があるのではないかと考えられます。

(齋藤議長)

ありがとうございました。前回希望がありましたので、ここで10分間休憩を入れます。

その後、皆さん一読してきていただいていると思いますので、「ここは分かりづらい」など率直に意見を出していただきたい。印刷されて外に出て行きますので、私もたくさん修正の帯が入っていますが、35分まで休憩しますので、その間に一つくらい、考えてください。よろしくお願いします。

(休憩)

(齋藤議長)

再開させていただきます。

先ほど言いましたように、この調査報告書は市民も見ますので、ここは分かりにくいとか、こうしたら、というような率直なご意見がありましたら、出していただければありがたいと思います。ご質問、ご意見、代案などありましたら、お願いします。

では、私から切り出します。62ページ、結果考察の前に、「上位三つの関係者は、実際の活動上の関係者の同様であるが、この中でも共通の興味や目的を持つ人の比率が約2倍程度にまで上昇している」という文章は、通じないのですが、中村委員さん。

(中村委員)

これは、蕙沢さん(委託業者:ITスクエア)が書いてくださったところで、私も指摘してお渡ししたのですが、多分「と」ではないかと。

(齋藤議長)

ひらがなの「の」を「と」に書いたと。

(中村委員)

そうではないかと思うのですが、業者に返して、直してもらう形になるのでしょうか。

(齋藤議長)

「と同様であるが」と、そういう形になるわけですね。

それから、例えば54ページですけれども、下から3行目のところを読みますと、休止・停止を理由別で見ると、「活動のための情報」92パーセント、「意見や考え方の違い」91パーセント、「時間」94パーセント、「世話が必要」84パーセント、「活動の場」11パーセントをあげた人たちで参加実施率の高さが目立つと、休止・停止の理由であげているけれども、参加実施率の高さが目立つというのは、すっと入ってこないのですが、内田委員さん。

(内田委員)

どう書けばいいですか。

(齋藤議長)

この文脈からいくと、阻害要因や何か理由のある人が、これが解決ができれば参加するよというイメージなのかどうか、私の読み取りでいいのかどうか。読んでいってすっと入ってこないものですから。その他ございませんか。

(笠原委員)

25ページですが、先ほども先生からご説明がありましたが、設問が変なのですが、これはこの文章が変なののでしょうか。

(中村委員)

設問が変ですね。このプリントが変なのです。

(笠原委員)

手元にきているのだけが変なのですね。

(中村委員)

そうです。

(笠原委員)

アンケート調査にはこの文章ではないのですね。

(中村委員)

ないです。

(笠原委員)

であれば結構です。

(中村委員)

すごく大きな間違いですね。

(笠原委員)

不思議なものですから、このまま使えるのかと思ったものですから、すみません。

(中村委員)

私も今、自分で説明しながら思いました。

(福島委員)

31 ページの社会活動への関わり、学校訪問の状況、この1年間に学校へ行った、行かないということを知っているのですが、保護者以外で学校に行ったどうかというのは、アンケートでは聞いていますか。つまりこれを見ると、個別懇談や授業参観というのは、当然保護者であれば学校に来るわけですが、学校に関係のない、保護者でない人たちがどのくらいの割合で来ているかというのは出していますか。

(内田委員)

質問書の設計の時に、学齢期のお子さんがおられますかという質問をしていけば簡単に出てきますが、今回そういう設計になっていなかったの、かわりに代替で、いくつかの授業参観や、特に個人懇談とかPTA活動で行く人は、ほぼ保護者だと見なすというふうに推論するしかなかったのです。そういう質問がなかったので、そこまでテクニカルなことができませんでした。

ただ、左下のボランティアな活動に関わっている人たちは、年齢層も結構広がりがありますし、保護者というのだけだといたい30代、40代、特に女性のところに集中していますので、それ以外の層の人たちがこれだけ入ってくるということでは、保護者とはかなり色合いが違う人として関わっていると、ある程度推論はできるのです。確かにそうかと言われたら、分かりません。

(齋藤議長)

他の委員の方、よろしゅうございますか。

ここは分からないなどの意見は、タイムスケジュール的に今月いっぱいくらいまで大丈夫でしょうか。教育委員会の定例会は11月のいつですか。

(事務局)

17日月曜日です。その1週間前に教育委員の方にお送りします。

(齋藤議長)

ご指摘のあった後、ここを担当いただいた先生に、こういう疑問がきていますと言って伝えるのと、代案も必要ですね。

(事務局)

そうすると、やっぱり1週間ですね、今週中。

(齋藤議長)

やはり今月いっぱいですね。ここは通じないとか、そういう意見がありましたら、今月いっぱいまでに事務局の方に届けてください。

(伊井委員)

もう少し余裕はないのですか。時間がないですね。

(齋藤議長)

それとも、多分教育委員会からも疑問が出てくるから、それを含めて最終調整する発想でいきま

すか。そうすると 17 日くらいでもいいのではないですか。

(事務局)

教育委員会の前に、委員の皆様方の質問や意見をまとめたいので、もう 1 週間前にして、10 日ということではいかがでしょうか。

(齋藤議長)

こういう質問も出ているくらいにしておいて、代案で書き直さないという形でね。日にちをおっしゃってください。

(事務局)

10 日、月曜まで。

(伊井委員)

11 月 10 日まで。ファックスでもいいですね。

(事務局)

ファックスでも、メールでも。

(齋藤議長)

取り違えるから電話はまずいと思いますのでファックスかメールで、生涯学習課まで質問、ご意見を提出してください。

(伊井委員)

質問もいいですか。

(齋藤議長)

はい。通じないということであれば、通じるように直さなければいけないので、11 月 10 までに質問を事務局の方にお出してください。発表のお二人の委員の方、ありがとうございました。それから、今日、これを回収すると言っていましたけれども、ちょっとできませんね。

(事務局)

そうですね。外部には出さないということでお持ち帰りください。

(齋藤議長)

取り扱い注意をお願いします。今日置いていくよという人、アカペンが入っている人は置いていただければ結構です。

それでは、議事進行をさせていただきます。協議事項(2)「現状と課題について」、事務局お願いします。

(事務局)

現状と課題というテーマでは、今回は公民館と図書館を中心として、どのような事業があるかということをもとめました。さらに、大学や専門学校の状況、博物館や資料館、体育スポーツ施設、コミュニティセンターなどもありますが、今回は公民館、図書館を中心とした内容でまとめ、次回にまた別な課題として提出させていただきたいと思っております。

この資料は左側が公民館、真ん中が図書館、そして一番右側に地域とふれあい推進課がやっておりますパートナーシップ事業での数字を整理させていただきました。まず、公民館では、上から下に北区から西蒲区まで区で分け、「基」は基幹公民館、地区公民館、分館に分け、それぞれ事業数と利用団体数のみ掲載させていただきました。

まず、基幹公民館、地区公民館の事業数について着目していただきたいのですが、事業数を上から下まで眺めていただきますと、だいたい 20 から 30 の事業数を年間に受け入れています。特徴的なのは江南区で横越地区公民館が 49、中之口地区公民館が 39 と少し飛び抜けております。これは、かつて文部科学省の委託を受けた子ども体験支援事業、子どもの体験活動を行っている事業が非常に多くなっているという理由からでございます。

それから、人口比で見たのですけれども、人口に比して特徴的なのが秋葉区の公民館でございます。利用団体の数でございますが、全体で 340 団体あり、人口比では、秋葉区の人口が全市の 9 パーセントであるのに対し、利用団対数では、市の公民館全体の 4.8 パーセントとなっております。倍

第 2 8 期新潟市社会教育委員会議

近い差になってしまいますが、秋葉区は新津地区公民館と小須戸地区公民館の 2 館しかございません。その差が歴然と出ているということでございます。その他は、だいたい人口比に比した事業数、利用団体数でございます。

次に、分館の利用団体で非常に多いところがございます。北では早通公民館が 126、南区の中の白根公民館が 190、小針青山公民館は分館でございますが、442 という、他の地区公民館に比べても非常に大きい数字でございます。

続きまして、図書館でございます。図書館は、各区ごとに基幹的な図書館を設け、地区図書館が配置されております。例えば北であれば、豊栄図書館が基幹図書館で、松浜図書館が地区図書館です。その中に地区図書室があります。蔵書冊数に比して貸出冊数が非常に目立って多いのが、例えば東区の山の下図書館でございます。54,000 冊の蔵書を持っておりますが、223,000 冊を貸し出しています。同じく石山図書館では、41,000 冊に比して 290,000 冊を貸し出しています。似たようなものがまだありまして、鳥屋野図書館 42,000 冊に比して 280,000 冊、生涯学習センター図書館 51,000 冊に比して 250,000 冊、坂井輪図書館 45,000 冊の蔵書に対して 300,000 冊の貸出冊数となっております。

また、蔵書冊数が一番多いところは、当然ですけれども、中央区の中央図書館でございます。続き、北区の豊栄図書館で、合計で 222,000 冊、3 番目は秋葉区の 181,154 冊です。

貸出冊数では、中央区の中央図書館が一番ですけれども、西区の 682,000 冊が飛び抜けております。2 番目が東区の 551,000 冊、北区の 415,000 冊という順番になっています。

パートナーシップ事業では、今年度のパートナーシップ実施校でございます。今年度は小学校が 32 校、中学校が 8 校で小中学校を合わせ 40 校で実施をしております。

次に、前回お話がありました、にいがた市民大学の実施状況と、地域学についてご説明します。市民大学の平成 19 年度の実施状況では、中央区の生涯学習センターで、にいがた市民大学として全部で 8 コース、秋葉区の新津地区公民館が、秋葉区市民大学として 13 コース、南区の白根地区公民館が、しろね市民大学として 28 コース実施しております。なお、しろね市民大学講座のところに印で「市民自主運営講座」と書いてありますが、これらは市民が企画委員として、それぞれ自主的な企画等運営を行っているものでございます。また、豊栄地区公民館では敬和大学、医療福祉大学の連携事業として大学講座を実施しております。

次に、地域学の実施状況です。地域学は、平成 9 年からスタートさせました。スタート時の平成 9 年は、東地区公民館と坂井輪地区公民館で実施したものです。それぞれ実施年度にあわせて 印を振らせていただいております。ここで、訂正をお願いします。東区の中地区公民館の下に、本来であれば石山地区公民館がなければならぬのですが、落ちておりましたので、石山地区公民館と記していただき、15、16、17 と 印をつけていただきたいと思います。申し訳ありませんでした。

(中地区公民館長)

もう一つ訂正してよろしいですか。大形公民館でも地域学が実施されております。

(事務局)

分かりました。年度は分かれますか。

(中地区公民館長)

正確には分かりません。

(事務局)

只今の状況を加えまして、新しい正確な状況を次回までにお伝えしたいと思います。申し訳ありませんでした。

地域学につきましては、 をつけてあります。中地区公民館と横越地区公民館が 19 年からスタートしております。それから、新津地区公民館、白根地区公民館、それから巻地区公民館が今年からスタートしています。なお、テーマのところは、20 年度に設定いたしましたテーマをそのまま載せています。以上でございます。

(齋藤議長)

第28期新潟市社会教育委員会議

ありがとうございました。委員の皆さんから訪問調査で温度差がだいぶあるというご指摘でありましたので、公民館、図書館、パートナーシップ事業、地域学について説明をいただきました。ご質問等がございましたら、お願いします。

(笠原委員)

図書館ですが、蔵書冊数と貸出冊数が出ていますが、貸出冊数＝利用数ではないと思うのです。図書館はよく利用しますが、いろいろな図書館から取り寄せが可能です。貸出冊数は、例えば坂井輪の図書室にしょっちゅう行って、そこからいろいろ取り寄せてもらった場合、利用はすごく大きいけれども、よその図書館からとっていると、その数字ではなくて、貸出数に当たっているということですね。

(齋藤議長)

貸出の意味ですね。事務局、説明をお願いします。

(事務局)

貸出冊数については、当該館がカウントした冊数になりますので。

(笠原委員)

利用館ということですか。

(齋藤議長)

もう一回おっしゃってください。

(事務局)

その館で貸し出した冊数ということですよ。

(齋藤議長)

その館にある本でなくてもいいということになりますね。

(事務局)

そういうことです。

(齋藤議長)

分かりました。他にご質問はないですか。

(中村委員)

利用数というのは分かるものですか。一人の人が何冊も借りているかと思うのですけれども、利用者数というのは分かるものですか。

(事務局)

利用者数というのは、例えばふらっと来られて本を手にとって、そして、そのまましまわれて帰られる方もいれば、勉強しに来られる方もいる、または本を借りに来られる方もいるという、図書館には多様な使い方があり、それを正確に把握するのはできる館とできない館がございます。ですから、トータルの数字が出せないものですから、今回の資料にまとめることができませんでした。

(中村委員)

貸し出した人の人数というか、本を借りた人の人数は、利用した人は様々な利用の仕方があると思いますが、フラッと入るといって、これの延べ人数ということですよ、実質人数。

(事務局)

それは出ます。貸出をした人の人数については出ます。

(中村委員)

そうすると、一人だいたい何冊くらい借りているかというのは分かるかなと。

(事務局)

そうですね。約100万冊が19年度では貸し出しされていますので、それを館別に分けると、確かにそれは出るとお思いますので、それは次回にさせていただきます。

(齋藤議長)

他の委員の方、よろしゅうございますか。

(内田委員)

できたら、先ほどの人口割とかをそのまま表にあげていただいた方が見やすいかなと思うのですが、計算結果を見て。

(齋藤議長)

今の図書のところですか。

(内田委員)

全体に、例えば公民館の利用団体数も。

(齋藤議長)

公民館の方。

(内田委員)

人口規模ごとに説明されて、そういうのがあった方がよろしいかなと、温度差を見るのだったら、これだと分からないので。

(齋藤議長)

母集団との関係でね。

(笠原委員)

市民大学ですが、中央の生涯学習センターは全市を対象にしておりますが、他のところ、北、秋葉、南区は、受講対象は、それぞれの地区ですか、

(事務局)

各区で行われているものについて、各区を対象にしています。ただ、区外から来られる方については、もちろんお断りするわけではございません。

(笠原委員)

ありがとうございました。

(齋藤議長)

笠原委員さん、どのくらい区以外から来ているのか知りたいのですか。

(笠原委員)

受け入れているかどうか知りたいと思ったものですから、区民を優先にして、余裕があれば、他の人も受け入れてくれるのかどうかというところが、知りたかったです。

(齋藤議長)

分かりました。例えば秋葉区は市報か何かに出ていますか。

(事務局)

2の資料については、今は区民だよりによって広報いたします。

(齋藤議長)

そうすると、区が違うと分からないということですね。

(事務局)

そうです。

(齋藤議長)

それはどうやって補うのでしょうか。

(笠原委員)

市のホームページにはのっていますか。

(事務局)

ホームページにはのせています。隣接する区、もちろん区役所や公民館には各区の区民だより、市報にいがたをそろえてありますし、各家庭でいうと、それぞれの区の区民だよりと市報にいがたしかまいませんので、その施設に行かれてご覧になると分かるのではないのでしょうか。

(齋藤議長)

だいたい分かりました。区民対象で、空いていたら入られるけれども、他の区の人には分からないと、そういうことですね。

(事務局)

ホームページには公開しておりますが、ご覧になれない人は難しいと。

(齋藤議長)

ホームページを見る人は、先ほどの調査報告では20代のようにでしたが。

(伊井委員)

今の市民大学の状況を観察すると、秋葉区、南区の講座名で、中央区にはないようなものがあります。これは秋葉区と南区が、新潟市にあらたに参入した関係だろうと思いますが。中身が全然違うわけだから、中央区とは比較にならないような感じがするのですが、如何でしょうか。

(齋藤議長)

企画のポリシーを教えてください、お願いします。

(伊井委員)

簡単に言いますと、秋葉区に「男の料理教室」と書いてありますが、これは、市民大学の講座という感じではないと思いますが。

(事務局)

南区は市民がそれぞれ運営していますが、公民館では教育的なものをやろうということと、趣味の講座については市民大学でやりましょうということで、一応すみ分けさせてもらっています。市民の講座は市民大学というような形で、ほとんど趣味的な講座ばかりです。

(齋藤議長)

ありがとうございます。秋葉区はどうでしょう。秋葉区はおいでになっていない。

では、そういう質問があったということで。田中次長、生涯学習センターはどうでしょう。

(田中次長)

市民大学は16年ほど前にスタートしましたが、当時の公民館事業に対して、高度な学習といえますか学習要求が、大学開放講座があまりない時代でしたので、三鷹市や世田谷区あたりで市民大学の構想が出てまいりました。これは有料で、社会人の義務教育というようなくくりではとらえきれない、少し高度でしかも継続的でゼミナールなどという、そういうコンセプトで考えております。

(齋藤議長)

三つか四つ並べられた時、伊井委員さんの質問は、この四つ双方をどういう位置づけでやっているのかというご指摘だと思いますけれども。

(田中次長)

同じ市民大学ではありますが、これは合併した経緯があり、有料、無料が混在しております。このテーマとはまた別の話になりますが、新潟市の市民大学は公民館事業、社会教育事業から少し離れているという認識であります。当時の構想としては、大学と単位が交換できるなどの発想もあったわけですが、そういった中で一応運営していると。他ににつきましては、従来の新潟市であれば、公民館講座に収まっていくということになると思います。

(齋藤議長)

伊井委員さん、よろしいですか。

(伊井委員)

分かりました。

(齋藤議長)

他の委員の方ございますか。いずれにしる温度差がありますよと、それを公民館、図書館とかそういう角度から見るとこうなりますというお話だったと思います。ありがとうございました。

急ぐようですが、協議事項の(3)に進みます。

「計画策定に向けた骨子づくりについて(生涯学習の振興と要請)」ということで、これは宿題になっていたもので、皆さんからレポートを出していただいたものです。一応ご自分が出されたので間違いがあったら、ご発表の時にお話しすればいいかと、時間が限られてきているので、この中で一番これから力を入れて、先を見越してやっているところはここだというものを、多分全部だとおっしゃりたいと思いますけれども、一つに絞ってご発表いただきたいと思います。では、名簿順で伊

井委員からお願いします。

(伊井委員)

事務局の方からお話のあった最初のものが、現状を分析して課題は何かということ、その後に頂いた資料が中教審・県・全国政令指定都市の生涯学習基本計画であり、両方からせめて、その課題は何かというふうにとらえれば良いだろうと思って、参考までに、まず全体像を考えてみました。その中で、下線のところが、私の重要なところだと思いますので、下線のところだけお話ししたいと思います。

まず、現状分析のところでは施設・人材・情報の三つに分析されるだろうと思います。その中で、一つ、施設では交通手段が悪いとか、学校の敷居が高いとか、学校開放が不十分ということがありました。人材では、ボランティアが少ないとか、活発な人が少ないとか。情報では、広報が不十分、もう一つ新しく、マンネリ化というのがあります。

では、どういうふうにしたらいいかという課題が出てくるわけですが、1番目、一步踏み出して参加する勇気を養うのが重要ではないかと、また、産業界というものを取り込んだらどうかと。中教審の中にも確か入っていたような感じがしますが、ここでは、単なる遊休施設の利用で書いたのですが、産業界の人材利用というのも大事な事だと思います。

2番目は、リ・ダ・の育成という声は少ないとはいうものの、私はこれからはリーダーの育成が不可欠であろうと思います。また、人間というのは、無限の可能性があるので、そういうところを引き出してやるということが重要ではないかと、

3番目は、新しい公共という考えが少しずつ浸透しているわけですから、これをうまくボランティアと結びつけてやれば良いと思います。その時に、ボランティアが単なるお手伝いではなくて、有償ボランティアというの少しは考えてもいいのではないのでしょうか。ボランティアポイントみたいな何かいい名前の制度を提案したいと思います。

最後に4番目は、こういうのが生涯学習に適切かどうか分かりませんが、個人的に大人も子どもも全て、もう少しモラルアップしてはと考えています。

(齋藤議長)

では、五十嵐委員さん、お願いします。

(五十嵐委員)

「これは」という一つと言いましたので、一つにしてもらいます。項目1から4までは、この辺かなとあげてみました。まだ足りないところがあるかもしれませんが、「中教審の答申と持続可能な未来に向けて」というのを読みますと、だいたいそこに集約できるのかなと思いました。

私の一番上に上げたものがその一つです。生涯学習というのは、点や線では見えてくるのですが、なかなか立体的な形で見えないので、「新潟はネットワーク」、「新潟のネットワーク」でないのです。新潟市はネットワークできちっと仕組まれていて、こういう生涯学習の構造が成り立っていますというところの方、目標のテーマの感覚を入れてみました。以上です。

(齋藤議長)

ありがとうございました。笠原委員さん。

(笠原委員)

私は、課題抽出の根拠をここにあげました。まず、新しいものがどんどん出てくるのではなくて、第2期の生涯学習推進基本計画の研究からまず入るべきだろうと思いました。それで、引き続いて盛り込んでいく必要があるもの、さらにステップアップしていくもの、ですから、新しく取り入れるものというふうに分けて考えてみました。

その中で私が一番注目したのは、さらにステップアップして計画する必要があるところを考えてみました。社会貢献の推進をあげたいと思っています。そのために様々な学習者を増やすということなのですが、社会教育とか生涯学習に馴染みが薄い人をどう呼び込んでいくかということ私を入れていきたいと思っています。そのためには、多様な社会貢献のための条件整備が必要だと思っています。ボランティアバンクの他に、人材バンクを考えたらどうかと思っています。ボラン

ティアバンクは無償です。人材バンクの方は有償です。また機会があったら、詳しくご説明したいと思います。以上です。

(齋藤議長)

ありがとうございました。次は私ですが、私は先ほどの調査報告にもありましたが、新潟市の成果が出ていたと思いますが、公民館などできちっとやったものは活用されて、アクティブな形できちっと出ているというデータになっています。これからどんどん進んでいき、先を見越した時、国際化がもっと進んでいくので、外国人との身近な交流機会の展開をあげました。現在、新潟大学にはお子さんを連れて来ている留学生がいますが、まだサービスが悪いとか新潟市はかたくなだとか、いろいろな意見が出ていますので、留学生も望んでいることですがそこをきちんとやっていく必要があると思います。

それでは、新藤委員。

(新藤委員)

断片的にあげましたが、他に皆さんそれぞれあげられると思うので、私の「これ」というのがあるとすると、「コミュニティ協議会と公民館の守備範囲の明確化」、これをある意味ではっきりさせておかないと、地域の人たちの間で、コミュニティ協議会でやってもらえばいいのか、公民館に要望するのか、また、自分がどうやってかわっていくのかというのが地域の中でまったく見えていない状況なので、この辺やっぱり早いうちに明確にしていかないと、だんだんおおばらになっていくのではないかという危機感があります。その辺をまず明確にしていっての方がいいかなという気がしました。

(齋藤議長)

長谷川委員。

(長谷川委員)

私は、先ほどのアンケートの実態でも、生涯学習や社会教育といったものに、きっかけさえあれば、関われる層がまだまだいるのではないかと考えたところもありまして、キーワードとしては、多様さを認めるPRであったり、多様さを認める社会教育のあり方というか、それを考えていけたらいいのではないかと。具体的には年代ごとに合わせての講座のPRを考えてみたり、講座自体の開催の場所、展開の仕方を、例えば商業施設内でやってみるといったような場があってもおもしろいかなというのが一つ、あとは新潟市全体としての取組の方向の中に社会教育や、生涯学習が入ってくる。例えば新潟のシティプロモーション事業ということで、花を育てるとか食育などがあげられていますが、そういったものに生涯学習の取組がうまく融合していくという形の展開がいいのではないかと思い、このように書いてみました。

(齋藤議長)

ありがとうございました。福島委員さん。

(福島委員)

私は、共生と自立かなと思いました。新しい新潟市・政令指定都市ということで、やはり個人が自立していく必要があると、地域も自立していく必要があると。それらは共生しながらというふうに思っており、それを追求するためにはやはり人が必要なので、専門職として、これらの素養を持っている人間を育成していくことが大事だと思います。

(齋藤議長)

真島委員さん。

(真島委員)

とりとめのない文章ですが、ポイントを言いますと、先ほども出てきました様に、あまりにも情報がなすぎるといけないかなという気がします。私がこういう事を知るきっかけというのは、一番下に書いてあるように、この社会教育委員会議に関わるようになって初めて知ったことがたくさんあります。一般というか、そういうことを知らない人たちにとっては、どこでその情報が得られるのかとか、それさえも分からないというような状況ではないかという気がしています。

もう一つは、有償ボランティアというところからボランティア活動に入る方が、入りやすいのかなという気がしています。

(齋藤議長)

南委員さん。

(南委員)

私も皆様と同じような意見ですが、特に強調すべきところとしましては、幅広い年齢層がネットワークを形成して、共育、共同、共生を実現することを目標にするという形で、ネットワークを形成することが重要ではないかということと、新潟市として生涯学習を考える場合には、新潟市の特性を地域学的なものとか、特徴を生かすということも大きいベースになるのではないかと思います。書かせていただきました。

(齋藤議長)

たくさんお話になりたいと思いますが、一番言いたいところに絞っていただきありがとうございます。資料4は事務局で整理いただいたもので、前回と同様に、自分が書いたのはそこではないとか、こちらの方だというご指摘がございましたらどうぞ。

(南委員)

私のところで、学習機会というところに、「情報格差を生まないよう学習の機会を提供する」を入れていただきたいと思います。

(齋藤議長)

下の段から上の方へですね。分かりました。他にございませんか、よろしゅうございますか。だいたいいいところに位置づけておられるということですね。中村委員さんと内田委員さんのご意見、おありかと思いますが、次回に機会がありますので、そこでおっしゃっていただきます。

次は、作成スケジュールの説明を事務局からお願いします。宿題等もまた出るようですので。

(事務局)

スケジュールと次回までの課題についてご説明します。毎回で申し訳ございません。

まず最初に、次回はいつになるのかという日程の確認ですが、次回は12月1日の月曜日、白山浦庁舎の会議室で行います。この会議までにお持ちいただきます課題を説明させていただきます。

これまで現状と課題、それから未来からの課題について議論いただきました。それを整理し、「第3期新潟市生涯学習推進基本計画」を章立てしてみますと、第1章が趣旨、第2章が策定の背景、順当にすれば、このような形がいいのかと思って載せてみました。第3章は、新潟市における生涯学習の現状と課題、第4章が骨子、第5章が基本施策、第6章を基本施策を一元するために、計画をどう推進していくかというような章立てでいきたいと思います。

基本施策の欄は複雑に書きました。今まで現状と課題の問題点に議論いただきましたが、それが第3章にくるだろうと考えて、一番左の骨子が4章に位置づけられます。基本施策の部分が、真ん中の施策に位置づけられます。このような割り振りをしますと、きれいに章立てできるのかなと考えています。

それを今度は、左から現状と課題を議論していただいたものを、骨子と施策にまとめたいと思っております。今回をお願いする課題は、骨子と施策の中身についてまとめていただきたい。伊井委員からは既に提出されておりますが、そのような形で提出をお願いしたいと思っております。

この課題の提出は、12月1日ではなく、11月17日の月曜日までにお送りいただきたい。

もう1点、日程についてですが、会議日程をご覧いただきたいと思います。12月1日が第5回、第6回の最終回が2月23日を予定しております。12月1日と2月23日の間が非常に広く、この間、会えないのは非常に寂しいので、間に1回入れていただければありがたいです。日程上、押せ押せになっておりまして大変申し訳ありませんが、この会議で骨子を決めていただき、骨子案が成案になり、次の作業に移られればと思っておりますが、ご了解いただきたいと思います。

(齋藤議長)

このスケジュールで会議時間を延長して、濃密に議論していただいておりますが、なかなか進みま

第28期新潟市社会教育委員会議

せん。要するに1回増やしたいと、増やすにあたっては、12月1日と2月23日までの間があいているので、ここにセットしたいという事務局の意見ですが、もう1回増やすということですが、よろしゅうございますか。12月の暮れがいいか、1月の初っぱながいいか、意見が分かれると思いますが、スケジュール調整の必要がありますので、日程の用紙を配付しますので、課題と一緒に11月17日まで一緒に事務局に送っていただくとありがたい。

月曜定例できていますので、月曜日を優先的にをつけていただくと、時間帯は午後です。お願いします。

ではその他、新潟県社会教育研究大会の報告を笠原委員さんと新藤委員さん、申し訳ありませんが、簡潔にお願いします。

(笠原委員)

プリントが出ておりますので、お読みいただければ分かると思います。情報交換会について、新藤さんも同じことを書いてありますが、5時15分から情報交換会が始まったのですが、これは少し早すぎるのではないかと思います。分科会の時間が足りない、足りないというのは、1から3の分科会すべてが言っておりましたので、そちらに回したらどうかという、これはアンケートの中に入れてきました。

それで一番下に、とのおか先生(茨城大学)特別参加とありまして、「とのおか」という文字がひらがなで書かれております。これはレジメに書いていない先生でした。それで、口頭紹介でしたので、どんな文字が当てはまるかというのが分かりませんでしたので、ひらがな表記いたしました。以上です。

(新藤委員)

私は、分科会の方だけ主に書かせてもらったのですが、第3分科会で、「生涯学習によるまちづくり」というテーマだったので出させてもらったのですが、「寺子屋教育」ということで、子どもたちの居場所づくりのようになったので、私が期待していたのは生涯学習によるまちづくりなので、どちらかと言うと、団塊の世代が世の中に出た時に、まちの中にどういう形で受け入れるのかなというのを期待したのです。ですから、寺子屋と、この発表が悪いということではないのですが、寺子屋を運営する退職された先生方とか、先生を目指している若者たちの学習の課題を消化する、そちらの方向にもし発表していただけると、もっと違ったのかなという感じがしました。以上です。

(齋藤議長)

ありがとうございました。来年は糸魚川だそうです。では事務局へお返しします。

(事務局)

先ほど市民大学のところで、それぞれの区の事業の情報があまり伝わらないのではないかといいことでありましたが、公民館では市民大学だけではなく各区の公民館の情報が伝わりやすいように努力をしているところですが、その一つとして、各公民館が行います事業をそれぞれ印刷しまして、各公民館で情報提供をしています。それは、各公民館の掲示板に貼り出すということをしているということだけ申し添えておきます。

(伊井委員)

今やっているのですか。

(事務局)

現在やっております。

(齋藤議長)

関屋公民館に貼ってあります？

(伊井委員)

分かりません。

(齋藤座長)

貼ってないそうです。

(事務局)

第28期新潟市社会教育委員会議

確かめてみます。

(伊井委員)

似たようなことを協力委員の方がやろうという考え方があったのです。公民館新聞とか何かで、そういうような形で、それでお聞きしました。

(事務局)

長時間にわたりましてありがとうございました。委員の皆様、大変お忙しいのは重々承知していますが、毎回課題を出させていただきまして本当に申し訳ありません。11月17日まで提出ということで、どうぞよろしくお願いたします。

次回は先ほどご案内のとおり、12月1日月曜日午後2時からでございます。

今後のスケジュールですが、29日から2泊3日で長野市で開催されます全国社会教育研究大会に参加をお願いしております齋藤議長と伊井委員につきましては、お疲れのところ申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願いたします。では、以上をもちまして今回の会議を終了させていただきます。

どうもありがとうございました。